# 御庭焼と御用窯について

仲　野　泰　裕

## はじめに

近年、東京、京都、大阪などの都市部を中心に、近世遺跡の発掘調査事例が増加しており、多くの陶磁資料の出土が知られるようになっている。近世遺跡から出土する陶磁資料は厖大な量であるが、これらの中に、限られた量ではあるが、御庭焼、御用窯などと呼ばれる窯で焼かれた陶磁資料の出土を、見出すことができる。これらの出土資料は、注意深い観察と区分により、藩邸、武家屋敷などを中心にその出土例が増加している。

一方、これらの製品は、献上、贈答など、一般的な商品流通とは異った経路によってもたらされたものがあり、近世陶磁文化の中において、特異な存在となっている。しかし、これらの分野における研究の日は浅く、あいまいな点も多く認められる現状である。このため、ここではまず、用語の整理、窯の分布と消費遺跡からの製品の出土状況など、その研究の足掛かりとなる基礎的な資料を収集、整理するものである。

## 1　御庭焼と御用窯の概念

江戸時代の諸窯の内、幕府、藩、公家、門跡寺院などが設立、運営または、その経営に関与した窯業地は、全国に数多く知られている。そしてこれらの諸窯は、御用窯、藩窯、御留（止）窯、御庭焼などの名称で呼ばれている。しかしこれらの名称の用いられ方は、統一された概念に基づくものではなく、それぞれの研究者によって食い違う点が多く認められる状況である。

このため、窯の紹介などに伴い、あいまいなまま多く使用されているものの、源点にもどり、これらの基本的な概念について、つきつめた研究は少ない。

徳川義宣氏は、『庭焼と藩窯展』の開催に伴い、「庭焼と藩窯　草創への一考察」という論文をまとめられた。この中で、「庭焼・藩焼ともに、その輪郭や定義がまだ定まってゐない今日」(注1)と前置されながらも、これらの用語と概念の洗い直しをされている。藩窯については、「朝鮮戦役に出陣した大名によって伴はれた朝鮮陶工達が、それぞれの大名の庇護と奨励のもとに窯業を起し」たのが嚆矢であり、「他の藩もこれに着目して陶工を招き藩窯を築いた。」としている。また庭焼については、「江戸別邸の内に築かれた窯が、職業的大量生産を目的であった窯であったはずはなく、これこそ大名の趣味、愛好によって築かれた窯」であるとしている。

次に、これらの用語について、『原色陶器大辞典』（加藤唐九郎編　淡光社　1972）では、

おにわやき（御庭焼）「江戸時代の諸藩主の中には、御用窯を特設するものが少なくなかったが、より一層好事的な藩主・城主・老臣らは、御庭焼といってそれぞれの城内や邸内に小窯を築き、茶器などを焼かせたものが多かった。」

おとめやき（御止焼）「江戸時代の藩窯。御庭焼には、製品をもっぱら藩侯の社交的な贈答品として、一般市場に出すことを厳禁したものが多かったが、この種の禁制品を御止焼といった。」

はんよう（藩窯）「江戸時代には陶器は一般に各藩で保護されていたが、ことに藩窯となって市販を禁じられたものは、その藩主の需要に供したのみならず、幕府への献上あるいは他藩への贈答品に供せられたため、精巧品が多くことに賞翫される。ときどき慰みに焼いた楽焼のようなものを除いてその著名なものは次のようなものである。 ――（略）―― 」とある。

これらの3項目をまとめると、御用窯、藩窯、御止（留）焼は、ほぼ同義語として用いられている。そして、当時陶窯は、一般に各藩で保護されていたという認識　にたち、御用窯などの言葉の示す対象となる内容は、これらとは別に設けられた窯であり、藩主などの需要に供した他、幕府への献上、あるいは他藩への贈答に供せられたものを焼成しており、これらには精巧品が多く、市販を禁じられたものが多い。また御用窯（≒藩窯）の中で、より一層好事的な茶器などを城内、邸内などに窯を築いて焼いたものが、御庭焼であると解釈することができる。

一方、『日本やきもの集成　全12巻』（平凡社　1982）をまとめた成果を生かし、新たに編集された『やきもの事典』（平凡社　1984）には、

藩窯　「―（略）―　江戸時代の諸窯が経営した窯 ―（略）― 御留焼として藩の什器や贈答品以外焼かせなかった窯から、藩の御用品を時々焼かせた窯、さらには殖産興業的に財政援助を行っただけの窯などさまざまあり、藩侯がお楽しみに焼く庭焼を含めて呼ぶこともある。」

御用窯　「江戸時代、藩主などが産業保護や藩主専用の物を作らせるために設けた窯。」とある。

このように、辞典等においても、見解に大きな差が認められるのである。両者共に、御用窯、藩窯を、ほぼ同義語として包括的に用いているが、それらの含む範囲は大きく異なる。特に、『やきもの事典』では、殖産興業的な資金援助や経営参画をした窯まで藩窯に含めている点である。

そこで少し目先を変えて「御用窯」の意味をもう少し深く考えてみたい。『広辞苑』（岩波書店　1977）には、「御用窯」という項目は認められないが、これに近いものとして、「御用商人」を掲げることができる。その②の解釈として、「認可を得て宮中または官庁の用品を納めることを業とする商人。」とあり、これを読みかえると「認可を得て宮中または官（藩）庁の用品（陶磁器）を納める（焼く）ことを業とする商人（窯屋）」と理解することができる。このような解釈が許されるとすれば、御用の相手は藩だけではなく、幕府、宮中など巾広く想定することができる。実際には、禁裏、上皇、宮家、門跡、茶家などの御用窯や御庭焼が知られてる。このため包括的な名称としては、すべてを含みうる「御用窯」を用いた方が良いと考えられる。

一方、実際に焼かれたものとしては、趣味性の高いもの、高級贈答品のいずれも採算を度外視したものであり、これらを焼いた窯と、あわよくば藩財政の助けとなることをねらって援助した殖産興業的な窯とは、明らかに異なった目的の元に存在する窯であり、当然焼かれたものも大きく異なっている。このため、後者の諸窯は、「御用窯」という枠の中に入れるべきでは無いと考えるものである。ただし、一般諸窯への好みによる注文品、特別な意匠を与えて作らせたものなど一時的な御用を勤めた窯も知られており混乱を深めているのも事実である。

**2　主な御用窯と、遺跡出土資料**

すでに述べてきたように、研究者により用語に統一性を欠く状況ではあるが、すでに、御用窯、藩窯、御庭焼、おたのしみ窯、御止（留）焼、さらには一部（又は一時）御用などを含め、窯業地を紹介する名称としてそれぞれ使用されている。これらの窯業地を検索してゆくと、全国に209箇所(注2)を数える。これらには、殖産興業的な窯業地が多く含まれており、本稿においては、御用窯等に含めるべきでは無いと判断した諸窯である。本来であれば、前項に示した視点に基づき、これらを区分してゆく必要があるが、ここでは、主要な窯業地と遺跡出土の製品を紹介することにより、それぞれの窯業地の特徴等を正しくとらえてゆくための第一歩としたい。

① 北海道、東北地方

この地方では、箱館焼を始めとして、24箇所の窯業地が知られている。

箱館焼（北海道函館市）は、安政四年（1857）、箱館奉行と美濃・岩村藩の支援により創始された窯である。箱館奉行所跡（五稜郭内）、松前藩戸切地陣屋跡（上磯郡上磯町）からの出土が知られる。磁器窯と考えられてきたが、箱館奉行所跡出土の陶製焜炉（涼炉か）に、「箱館」の印銘が認められ、注目を集めている。(注3)(注4)

この他、悪戸焼、鍛冶町焼、切込焼、堤焼、会津本郷焼、上ノ畑焼などの製品が遺跡から検出されている。(注5)

② 関東地方

関東地方では、常陸・笠間焼を始めとする関東北部の諸窯と、今戸焼、江戸高原焼、後楽園焼などを始めとする江戸城下の諸窯が知られており、20箇所を数える。

江戸城下では、将軍家御用とされる窯が多く知られる。江戸高原焼についても、諸説あるものの、大和・郡山藩主片桐石見守から四代将軍家綱に推挙された高原平兵衛が、承応二年（1653）浅草本願寺前に屋敷を賜わって開窯し、幕府御茶碗師となり幕末まで続いたと伝えられる。また、土佐藩御用窯尾戸焼の陶工で、藩命により江戸上府をした森田久右衛門の、江戸滞在中の延宝七年（1679）八月十二日の記録に、御意に基づき藩士と同道、江戸高原焼を買入れ、翌々日、藩主に御上覧の後、十五日、御意にてさらに三拾三買入れている。(注6) この記録には、器種、釉薬、文様等についての記述が認められないが、当時の江戸高原焼の評価の高さが認められる。さらに、加賀前田家江戸屋敷（本郷）への、五代将軍綱吉御成の記事（元禄十五年・1702）には、多くの陶磁器類が、将軍からの下賜品として記録されており、その中に、高原焼200が1箇所、高原焼茶碗100が2箇所認められ、下賜品の中に400の高原焼が含まれていたことがわかる。(注7) 御用品の使途の一端をものがたるものである。

また、江戸城下では、有力諸藩の江戸藩邸において御庭焼が認められるが、その出土例は少なく、尾張藩戸山藩邸跡（東京都新宿区戸山1～3）より、「楽二園」印銘資料、水戸藩付家老中山備前守屋敷跡（新宿区西稲田）より、楽茶碗及びその半製品の出土が知られるのみである。（表1）(注8)

一方、森田久右衛門は、江戸滞在中、藩主の御前のみならず、当時下馬将軍とまでいわれた酒井雅楽頭の屋敷などにも招かれて、作陶の実演を行い、お目にかなったものは、国元へ送り焼成させている。これらは、御庭焼や、御用焼物師の実状をうかがう好例といえるであろう。(注9)

③ 中部地方

中部地方では、越後・大浜焼を始めとして32箇所の窯業地が知られている。この地方の諸窯の製品も、遺跡出土例が知られるのは、僅かである。

九谷焼は、加賀藩の支藩である大聖寺藩が、領内九谷産の磁砿をもとに、同地において焼かせたものである。窯跡の発掘調査の結果「明暦弐歳（1656）」銘の陶片が検出されており、江戸時代後期に再興されたものと区分する意味から、一般に古九谷と呼ばれている。この古九谷の製品と考えられるものは、東京大学本郷構内遺跡医学部附属病院地点などから出土しているが、胎土微量成分の分析結果などから、古九谷、若杉窯、再興九谷、肥前などの他、いずれにも属さないものも認められ、その研究は新局面を迎えている。(注10)

尾張は、古くからの陶器生産の伝統があり、赤津の御窯屋加藤唐三郎家を中心に御用を務めて

いる。御深井焼は、名古屋城内御深井丸に開かれた窯であるが、その創始時期については、藩祖義直の治世と、二代光友の治世との二説がある。また、森田久右衛門が赤津を訪れた延宝六年（1678）九月六日の記録によると、「申候彦九郎兄弟三人御抱ニて　尾張様御用相勤申也御城之内ニ　かま仕やき申由」「尾張被仰付候焼物所ハ　御城之内ニ有　茶入かま也」とある。初期の御深井焼の製品は、尾張徳川家に縁のある寺院などに伝世するものが僅かに知られる他、不明な点が多く、久右衛門の記録は、非常に興味深い記述である。さらに二代光友が、塩湯治のため造らせた横須賀御殿にも窯があり、御窯屋が「御窯御用」に従事した記録があるが詳細不明である。

美濃・市之倉窯は、妻木氏を始め、江戸城本丸、西ノ丸の御用を務めた他、安政二年（1855）番町御薬園、村雲御所（日蓮宗尼寺、門跡）、文久二年（1863）紀州家御用、さらには禁裏、二条様、一橋様御用の記録が認められる。滝呂窯は、聖護院の御用を務めたという。(注11) 美濃・大垣藩の御用窯と伝えられる巨鹿城焼の在銘染付煎茶碗が、紀州藩江戸上屋敷にあたる紀尾井町遺跡（東京都千代田区）から出土している。(注12)(注13)

④　近畿地方

近畿地方では、近江・湖東焼を始めとして36箇所の窯業地が知られている。

湖東焼（滋賀県彦根市）は、文政十二年（1829）に創業し、天保十三年（1842）から文久二年（1862）まで彦根藩御用窯として操業し、それ以降は再び民間経営となっている。青磁、染付、色絵金襴手などに優品を残している。彦根城表御殿跡や家老屋敷跡などから、鉄釉流し建水（陶製）、染付花籠芙蓉文大皿、染付急須などが出土している。(注14)

信楽焼は、いわゆる「腰白茶壷」の生産地として知られている。この茶壷は、二代将軍秀忠が、信楽の茶壷を２本（三尺二寸、五升入）注文したのが初めで、以後、将軍家ならびに朝廷の御用品とされた。(注15) さらに寛永九年（1632）四月、三代将軍家光に、宇治茶を詰めた茶壷を献上してから将軍家への献上が制度化され、「御茶壷道中」が行われるようになった。この際の御茶壷道中の茶壷を一時保存（越夏させ、土用二日前に江戸城に入る。）するために、甲州街道沿いの勝山城（山梨県都留市）山頂に設けられたお茶壷蔵（御茶替蔵）推定地が発掘調査されて注目を集めている。(注16) 信楽茶壷は、お茶が長く湿らず、香気が失せないという評判から、諸大名もこれに準ずるものを競って求めたといわれる。献上茶壷は、四耳壷で、上部鉄釉下部白釉の掛け分けのため「腰白茶壷」と呼ばれている。これらは、従来の大粒の長石粒を含む信楽特有の胎土ではなく、水簸を重ねた緻密な白色土が用いられ、成形、焼成にも充分注意が払われたので上焼と呼ばれ、諸大名等に認められたのは並焼であった。

このような信楽の腰白茶壷と考えられる資料は、江戸城下の大名屋敷などから11例出土しているのを始めとして全国で16例（表２）が知られるが、寺院跡出土の１例を除くすべてが、大名屋敷跡、陣屋跡、城内などであり、武家社会の密接な関係が認められる。ただし出土資料には、いわゆる上焼と認められるもの、僅かに微細な長石粒の認められるもの、小形三耳壷などがある。

一方、十一代将軍家斉の時、文化七年（1810）十月、信楽に朝鮮通信使接待用の什器の注文があった。本碗から、飯櫃に至る16品目4300点、およそ350人分であり、将軍の代理が対馬において、通信使一行を接待する時に用いられたものと考えられる。御用茶壷と同等の極上の水簸土が使用され、土灰と長石を調合した並白釉が施されている。

膳所焼は、膳所藩の御用窯として知られ、小堀遠州に好まれたという。『隔莫記』にも茶器と

して多くの記述があり、当時の評価の高さがわかる。遺跡からの出土例は少なく、土佐藩安芸城内の家老五藤氏屋敷跡から、碗が出土しているだけである。ただ近年、膳所国分窯採集資料が、滋賀県埋蔵文化財センター(注17)に保管されていることがわかり、その後調査研究が期待されている。(注18)

粟田口、岩倉山、錦光山、音羽、修学院、仁清御室、帯山、清水など京焼諸窯は、将軍家、禁裏、上皇、宮家、門跡などの御用を受けている。また、青木木米は、青蓮院の御用焼物師を勤めた他、金沢春日山窯（加賀藩御用窯）の開窯に伴い招請されて技術指導したのを始めとし、高橋道八、永楽保全、欽古堂亀祐などが各地の窯業地に影響を与えている。遺跡からの出土例は、江戸城下の大名屋敷跡など10遺跡（粟田１、岩倉及び岩倉山６、錦光山３）が知られる。（表３）

丹波・王地山焼は、文政年間（1818～30）に欽古堂亀祐が招かれ、篠山藩の御用窯として開窯されたもので、三彩、染付、青磁などに優品を残しているが、青磁製品は、三田焼と類似するものが多くある。遺跡出土例としては、篠山城下の武家屋敷跡などを掲げることができる。

摂津・高槻焼は、嘉永五年（1852）高槻藩主永井直輝が、湖南焼（円満院門跡御用窯）にいた永楽保全を招き数ケ月焼かせたもので、伝世品には、中国の明染写しが多く知られる。遺跡出土例は知られていないが、城内三の丸の発掘調査(注19)において、窯壁、匣などが出土している。

紀州藩和歌山城下には、多くの御用窯と御庭焼が知られている。中でも交趾風の偕楽園焼は、あまりにも有名であるが、一方で、十代藩主治寶（はるとみ）は、保全や旦入を招き庭焼を楽しんでいる。瑞芝焼と藩との関係は、文献資料等に認められないようであるが、偕楽園御庭焼に招かれた三井家の伝世資料の中に、紀州侯から瑞芝焼の拝領品が認められ、御用品を焼いていた傍証となると共に、技術水準も、青磁製品を中心に極めて優れたものが認められる。(注20)

播磨・東山焼は、藩の御土産品生産のため天保二年（1831）男山八幡宮参道脇（姫路市山野井町）に移窯され、御用窯として本格化した。尾形周平、高橋道八、水越与三兵衛らが招かれ、染付、青磁、色絵製品などを焼いた。姫路城内武家屋敷跡(注21)や明石城跡(注22)からの出土が知られる。

⑤　中国地方

中国地方では、美作・沢山焼を始めとして、閑谷焼、姫谷焼、萩焼、楽山焼など42箇所の窯業地が知られている。

その中で、虫明（ひしあげ）焼（岡山藩家老）、宗箇焼（広島藩家老）、須佐焼（萩藩家老）など、雄藩家老職の御用窯が多いこと、萩藩毛利家の一門の阿川家、支藩にあたる長府藩、清末藩などに、それぞれ御用窯が認められるなど、他地域と異なる特徴となっている。ただ遺跡出土資料は少なく、萩焼系の雑器が、江戸城下の武家屋敷跡などで僅かに検出されているだけである。

⑥　四国地方

四国地方では、阿波・阿波焼を始め、18箇所の窯業地が知られている。

讃岐・理兵衛焼は、京都粟田の陶工紀太理兵衛が、初代高松藩主松平頼重より、栗林公園北門近くに土地を拝領して、慶安二年（1649）に開窯したもので、代々御用焼物師を勤め、十五石十人扶持中間二人を許され、京焼風の色絵陶器を多く焼いている。遺跡からは、紀州藩江戸上屋敷跡にあたる紀尾井町遺跡(注13)から、色絵葵唐草文輪花皿が出土している他、高松城東ノ丸跡及び城下町(注23)（町屋）から、それぞれ碗が出土している。

土佐・尾戸焼は、土佐藩二代藩主山口忠義に招かれた大阪の陶工久野正伯が、承応二年(1653)に、現在の高知市小津町に開いた御用窯で、森田久右衛門と山崎平内が弟子入りし、以後、森田

窯は白土を用いて京焼風の茶陶、山崎窯は日用品を中心に焼いた。初代久右衛門が、藩命により四代藩主豊昌に伴い、江戸上府した時の記録「森田久右衛門日記」は、すでに一部引用したとうり、陶工の目で各地の窯業地を視察した際の記録であり、近世窯業史料として極めて重要である。一方、尾戸焼製品の贈答先は、全国に及んでいるが、その記録の一部が、丸山和雄氏により「森田久右衛門江戸日記について」（『東洋陶磁』第5号、1978）に紹介されている。

貞享二年より三年　松平陸奥守　茶碗六、茶入二、水指二、大久保加賀守（老中）　茶入、土屋相模守（所司代）　茶碗五、茶入二、皿五二、牧野備前守　茶入

元禄二年より三年　松平隠岐守　茶碗十、戸田山城守（寺社奉行）　膾皿七十、

元禄四年以降の主なもの　養柳院（豊昌姉）　香炉一、香合一、山内豊房（豊昌養嗣子）香炉二、阿部豊後守　水指一、風炉二、風炉前土器二十、山崎勘解由　茶碗二、香合、松平安芸守　膾皿五十、神尾市左衛門（後の大目付）　香炉二、大久保加賀守　せきれいの皿二十、土屋相模守、せきれいの皿二十、神尾市左衛門　茶碗二、茶入一、手桶茶入一、阿部豊後守　手桶花入一、茶入一、風炉一、細川越中守　せきれいの皿二十、桑山可斎　獅子香炉一。以上のように尾戸御用窯において焼かれた製品、あるいは贈答の実態などを究明してゆく上で重要な史料である。文政三年（1820）能茶山焼の開窯と共にそちらへ移り、磁器製品も焼かれるようになっている。遺跡からの出土状況は、現在のところいずれも県内に限られるが、尾戸焼は、田村遺跡群（南国市）の内、屋敷跡、田村城外堀など3遺跡から、碗、皿が出土している。能茶山焼は、田村遺跡群の屋敷跡5遺跡、鹿持雅澄邸跡[注24]（高知市）から染付磁器、栗本城跡[注25]（中村市）から飴釉皿、五藤氏屋敷跡[注26]（安芸市）から碗が出土している。また、五藤氏屋敷跡は、安芸城内の土佐藩家老屋敷であるが、尾戸焼風の半製品と窯道具が出土している。[注17]

⑦　九州地方

九州地方では、豊前・上野（あがの）焼を始めとして釜山・和館窯を含め37箇所の窯業地が知られている。

上野焼は、豊前藩主細川忠興（三斎）が、朝鮮の陶工尊楷を招き、慶長七年（1602）小倉城下の菜園場に窯を築かせたのが始まりとされ、その後釜ノ口などにも築窯された。遺跡からは、室町遺跡[注27]（北九州市小倉北区）、大手町遺跡[注28]（同）などから出土しており、砥石山遺跡[注29]（同市小倉南区）からは、献上上野茶碗、皿山本窯製建水などが出土している。

高取焼は、築前藩主黒田長政の指示により、朝鮮の陶工八山が慶長十一年（1606）、現在の直方市永満寺の宅間に築窯したのを始め、内ケ磯、白旗山などが知られている。従来、伝世資料は、上野、高取と萩の一部を含めて混乱が認められ、消費遺跡の発掘調査報告書においても、上野高取併記の紹介が多く認められた。しかし、近年の窯跡の発掘調査の成果と、それをふまえた展覧会の開催などにより、調査研究が急速に進んでいる。高取焼の出土遺跡は、福岡県を中心に、堺、江戸など9箇所が知られ、なかでも福岡城三ノ丸御鷹屋敷跡[注30]からは、内ケ磯や白旗山の碗、小石原鼓の茶入などが大量に出土している。（表5、6）

鍋島焼は、鍋島藩の御用窯で、有田内山の岩谷川内から南川原山を経て、延宝年間(1673～81)に伊万里郷大川内山に御道具山を設け、分業化した職制を整え、精巧な作品を焼成した。製品には、染付、色絵、青磁、染付青磁など、大半は木杯形、櫛高台の皿類であった。これらの製品は、将軍家への献上品、諸大名への贈答品、佐賀城内の調度品などとされ、一般に販売することは厳しく禁止されていた。遺跡出土例は、江戸城下町の発掘調査の進展と共に急速にその例を増して

おり、関東地方で初めて検出された旧芝離宮庭園遺跡（東京都港区海岸）以来注目を集め、現在までに14箇所が知られ、他地域を含め21箇所を数える（表７）。多くは、大名屋敷跡、武家屋敷跡などからの出土であるが、八丁堀遺跡(注31)（中央区八丁堀）のように町屋から色絵鉄線唐草文尺皿が出土する例もある。また、高遠藩下屋敷にあたる内藤町遺跡(注32)（新宿区内藤町）からは、色絵を含む盛期の陶片194点が出土している。一方では、柴又河川敷遺跡(注33)（葛飾区柴又）のように住居地域以外からの出土も知られる。全体としては、三栄町遺跡(注34)（新宿区三栄町）染付皿13点、真砂遺跡(注35)（文京区東郷）染付皿25点、青磁２点、白鷗遺跡１(注36)（台東区元浅草）染付皿19点のように、染付皿がその大半を占めており、中には三栄町遺跡や長尾遺跡(注37)（佐賀市金立町）のように色絵素地が出土するなど、鍋島製品の性格を考察してゆく上で、興味深い例が多く認められる。(注38)

八代焼は、寛永九年（1632）細川氏が肥後へ転封されると、尊楷がその子と共にこれに従い、八代高田郷に御用窯として窯を開いたと伝えられる。象嵌文を施した作品が有名であり、真砂遺跡からは象嵌文碗、白鷗遺跡１からは象嵌文壷の蓋、紀尾井町遺跡からは象嵌文壷の出土が知られる。象嵌文蓋付壷は、梅砂糖漬を入れ贈答品として使われた例が知られる。(注39)

この他、須恵焼、献上唐津、網田焼、末広焼などの出土例がそれぞれ数例知られる。

**おわりに**

御用窯等の名称、主な御用窯の生産と贈答など製品の動き、消費遺跡の出土状況などについて述べてきた。小稿は、来年度の特別展開催を控えた筆者の調査記録をまとめたもので、本人の力不足も手伝い論文としての体裁を備えるまでに至っていないが、これを足掛かりに、さらに調査研究を進め、当該分野の研究発展の一助となれば幸いである。

小稿をまとめるにあたり、貴重な御教示と御協力をいただいた下記の方々と機関に感謝の意を表する次第である。

荒川正夫、扇浦正義、小沢一弘、大橋康二、清水 実、鈴木裕子、田沢裕賀、谷口 栄、富樫雅彦、藤澤良祐、本田泰貴、松田直則、瀬戸市文化財課、三井文庫、早稲田大学校地埋蔵文化財調査室

（注）

1　『庭焼と藩窯』　根津美術館・徳川美術館　1979。

2　『やきもの集成』　平凡社　『世界陶磁全集』　小学館　他。

3　『特別史跡五稜郭跡　箱館奉行所跡発掘調査報告書』　函館市教育委員会　1990。

4　『史跡松前藩戸切地陣屋跡』　北海道上磯町教育委員会　1983。

5　佐久間光平・本田泰貴「東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題」『東北大学埋蔵文化財調査年報３』　同調査委員会　1990。

6　丸山和雄　釈読「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁５』　東洋陶磁学会　1978。

7　西田泰民「出土した輸入陶磁器類について」『東京大学本郷構内遺跡山上会館御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　1990。

8・9　荒川正夫氏（早稲田大学校埋蔵文化財調査室）御教示。筆者実見。

10　『東京大学本郷構内遺跡医学部附属病院地点』　東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書３　1990。

11・12　『多治見市史　通史編上』　多治見市　1980。他

13　『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』　紀尾井町遺跡調査会　1988。

14　『出土品にみる江戸時代の生活一彦根城家老屋敷出土品を中心に一』　滋賀県立近江風土記の丘資料館　1982。他

15　平野敏三　『信楽　陶芸の歴史と技法』　技報堂　1982。他

16　「茶壷蔵やはり実在？」　山梨日日新聞　1989、12、26。

17　『五藤氏屋敷跡発掘調査概要』　安芸市教育委員会。
18　「幻の膳所焼破片60点があった」　読売新聞（滋賀）　1990、11、16。
19　『高槻城三ノ丸跡発掘調査概要報告書』　高槻城跡遺跡調査会　1987。
20　清水　実氏、田沢裕賀氏（三井文庫）御教示。
21　『特別史跡姫路城跡』　兵庫県立歴史博物館　1984。
22　『明石城Ⅱ』　兵庫県文化協会　1986。
23　『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』　香川県教育委員会　1987。
24　『田村遺跡群』　高知県教育委員会　1986。
25　『平成3年度鹿持雅澄邸跡整備事業に伴う発掘調査（現場説明会資料）』　高知県教育委員会　1991。
26　『栗本城跡』　高知県中村市教育委員会　1985。
27　『埋蔵文化財調査室年報6』　（財）北九州市教育文化事業団　1986。
29　『砥石山遺跡』　（財）北九州市教育文化事業団　1984。
30　『筑前国福岡城三ノ丸御鷹屋敷』　福岡市教育委員会　1990。
31　『旧芝離宮庭園』　旧芝離宮庭園調査団　1988。
32　『京葉線八丁堀遺跡』　京葉線八丁堀遺跡調査会　1990。
33　富樫雅彦「東京都新宿区内藤町遺跡」『日本考古学年報42』　日本考古学協会　1991。
34　『柴又河川敷遺跡』　東京都葛飾区教育委員会　1987。
35　『三栄町遺跡』　東京都新宿区教育委員会　1988。
36　『真砂遺跡』　真砂遺跡調査会　1987。
37　『白鷗遺跡1』　都立学校遺跡調査会　1991。
38　「長尾遺跡」『香田遺跡　佐賀県文化調査報告書第57集』　佐賀県教育委員会　1981。
大橋康二氏御教示。
39　「高田焼象嵌砂糖壷」『庭焼及び藩窯』　社団法人霞会館　1978。

参考文献

1　『白金館址遺跡Ⅱ』　白金館址遺跡調査会　1988。
2　『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』　港区麻布台一丁目遺跡調査会　1986。
3　『北山伏町遺跡』　新宿区北山伏町遺跡調査会　1989。
4　『虎ノ門五丁目芝神谷町町屋遺跡』　港区教育委員会　1987。
5　『發昌寺跡』　新宿区南元町遺跡調査会　1991。
6　『東京大学本郷構内遺跡山上会館御殿下記念館地点』　東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4　1990。
7　『東京大学本郷構内遺跡理学部7号館地点』　同1　1989。
8　『東京大学本郷構内遺跡法学部4号館文学部3号館地点』　同2　1990。
9　『真砂遺跡第2地点』　文京区遺跡調査会　1991。
10　『喜多見陣屋遺跡Ⅰ』　世田谷区教育委員会　1989。
11　『高倉宮・曇華院跡第4次調査』　平安京跡研究調査報告書第18輯　財団法人古代学協会　1981。
12　『平安京左京五条三坊十五町』　平安京跡研究調査報告書第5輯　財団法人古代学協会　1981。
13　『三條西殿跡』　平安京跡研究調査報告書第7輯　財団法人古代学協会　1983。
14　『大坂城三の丸跡Ⅲ』　大手前女子大学史学研究所　1988。
15　『難波宮址の研究』　第8　財団法人大阪市文化財協会　1984。
16　白神典之・増田達彦「堺における近世の陶磁器と土器」『関西近世考古学研究Ⅰ』　関西近世考古学研究会　1991。
17　『有田・小田部』　第10集　福岡市教育委員会　1989。
18　『茶屋原西遺跡』　財団法人北九州市教育文化財団　1982。
19　『小糸遺跡』　財団法人北九州市教育文化財団　1987。
20　『金石城跡緊急発掘調査報告書』　長崎県教育委員会　1977。

# 遺跡からの出土状況（概要）

江戸・庭焼　　表－1

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 早稲田大学文学部地内遺跡<br>東京都新宿区戸山1～3 | 大名屋敷跡<br>（尾張藩下屋敷） | 「楽二園」印銘碗底部<br>（戸山別邸） | 注 8 |
| 参考 | 下戸塚遺跡<br>東京都新宿区西稲田1－20 | 大名屋敷跡<br>（水戸藩付家老江戸屋敷） | 手造り楽茶碗の半製品？<br>（中山備前守） | 注 9 |

信楽茶壷　　表－2

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 白金館址遺跡Ⅰ<br>東京都港区白金台5－20 | 武家屋敷跡<br>（幕士、書院番） | 小形三耳壷 | 参 1 |
| 2 | 發昌寺跡<br>東京都新宿区南元町19 | 寺院跡 | 四耳壷 | 参 5 |
| 3 | 内藤町遺跡<br>東京都新宿区内藤町 | 大名屋敷跡<br>（高遠藩下屋敷） | 腰白四耳壷 | 注 33 |
| 4 | 東京大学本郷構内遺跡御殿下記念館地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（加賀藩上屋敷） | 四耳壷3点 | 参 6 |
| 5 | 東京大学本郷構内遺跡医学部付属病院地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（大聖寺藩上屋敷・他） | 四耳壷 | 注 10 |
| 6 | 東京大学本郷構内遺跡理学部7号館地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（加賀藩上屋敷） | 三耳壷 | 参 7 |
| 7 | 東京大学本郷構内遺跡法学部4号館地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（加賀藩上屋敷） | 四耳壷2点 | 参 8 |
| 8 | 真砂遺跡<br>東京都文京区本郷4－15－2 | 大名屋敷跡<br>（小笠原佐渡守中屋敷・他） | 四耳壷（腰白） | 注 36 |
| 9 | 真砂遺跡第2地点<br>東京都文京区本郷4 | 武家屋敷跡<br>（旗本及び同心） | 四耳壷 | 参 9 |
| 10 | 白鷗遺跡1<br>東京都台東区元浅草1－22 | 大名屋敷跡<br>（出羽松山藩上屋敷） | 腰白茶壷 | 注 37 |
| 11 | 喜多見陣屋跡Ⅰ<br>東京都世田谷区喜多見1 | 陣屋跡<br>（喜多見陣屋） | 四耳壷（腰白） | 参 10 |
| 12 | 羽根貝塚<br>愛知県醒美郡醒美町 | 陣屋跡？<br>（船村） | 腰白四耳壷 | |
| 13 | 大坂城三の丸跡<br>大阪市東区京橋前之町 | 城跡<br>（三の丸） | 腰白茶壷 | 参 14 |
| 14 | 難波宮址<br>大阪市東区馬場町法円坂1 | 城跡<br>（徳川氏大坂城） | 四耳壷（長野の茶壷） | 参 15 |
| 15 | 高槻城三の丸跡<br>大阪府高槻市城内町1498－6 | 城跡<br>（三の丸） | 壷 | 注 19 |
| 16 | 金石城跡<br>長崎県下県郡厳原町今屋敷 | 城跡<br>（対馬藩宗氏居城） | 四耳壷 | 参 20 |

栗田系諸窯　　表－3

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 東京大学本郷構内遺跡医学部付属病院地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（大聖寺藩上屋敷・他） | 「栗田」印銘碗 | 注 10 |
| 2 | 紀尾井町遺跡<br>東京都千代田区紀尾井町 | 大名屋敷跡<br>（紀州藩上屋敷） | 「岩倉山」印銘土瓶 | 注 13 |
| 3 | 旧芝離宮庭園遺跡<br>東京都港区海岸1－13・14 | 大名屋敷跡<br>（小田原藩上屋敷・他） | 「岩倉」印銘碗 | 注 31 |
| 4 | 東京大学本郷構内遺跡法学部4号館地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（加賀藩上屋敷） | 「岩倉山」印銘碗 | 参 8 |
| 5 | 真砂遺跡<br>東京都文京区本郷4－15－2 | 大名屋敷跡<br>（小笠原佐渡守中屋敷・他） | 「岩倉山」印銘碗 | 注 36 |
| 6 | 真砂遺跡第2地点<br>東京都文京区本郷4 | 武家屋敷跡<br>（旗本及び同心） | 「岩倉山」印銘碗 | 参 9 |
| 7 | 豊華院跡<br>京都市中京区高倉通姉小路下ル東片町 | 寺院跡<br>（尼門跡） | 「岩倉山」印銘碗 | 参 11 |
| 8 | 郵政省飯倉分館構内遺跡<br>東京都港区麻布台1 | 大名屋敷跡<br>（白杵藩下屋敷・他） | 「鎗光山」印銘碗 | 参 2 |
| 9 | 真砂遺跡第2地点<br>東京都文京区本郷4 | 武家屋敷跡<br>（旗本及び同心） | 「鎗光山」印銘碗2点 | 参 9 |
| 10 | 白鷗遺跡1<br>東京都台東区元浅草1－22 | 大名屋敷跡<br>（出羽松山藩上屋敷） | 「鎗光山」印銘火入 | 注 37 |

理兵衛（高松）　　表－4

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 紀尾井町遺跡<br>東京都千代田区紀尾井町 | 大名屋敷跡<br>（紀州藩上屋敷） | 輪花皿（色絵葵唐草文）6枚<br>「高」印 | 注 13 |
| 2 | 高松城東ノ丸跡<br>香川県高松市玉藻町 | 城跡<br>（東ノ丸） | 「高」印銘碗 | 注 23 |
| 3 | 高松城城下町<br>香川県高松市紺屋町10－4 | 町屋跡 | 「高」印銘小杉形碗 | 注 23 |

上野　　表－5

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 真砂遺跡第2地点<br>東京都文京区本郷4 | 武家屋敷跡<br>（旗本及び同心） | 耳付壷 | 参 9 |
| 2 | 有田小田部第10集（103次）<br>福岡市早良区有田、小田部 | 富裕農民屋敷跡 | （上野製品） | 参 17 |
| 3 | 室町遺跡<br>福岡県北九州市小倉北区室町2－128 | 武家屋敷跡<br>（家老） | （上野製品） | 注 27 |
| 4 | 大手町遺跡<br>福岡県北九州市小倉北区大手町12－1 | 武家屋敷跡<br>（小倉城土塁外） | （上野製品） | 注 28 |
| 5 | 砥石山遺跡<br>福岡県北九州市小倉南区下城野2 | | 献上手碗<br>皿山本窯硬水 | 注 29 |
| 6 | 茶屋原西遺跡<br>福岡県北九州市八幡西区馬場山949 | 町屋跡<br>（長崎街道沿い） | （上野製品） | 参 18 |

高取　　表－6

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 東京大学本郷構内遺跡理学部7号館地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（加賀藩上屋敷） | 茶入 | 参 7 |
| 2 | 室町遺跡<br>福岡県北九州市小倉北区室町2－128 | 武家屋敷跡<br>（家老） | （高取製品） | 注 27 |
| 3 | 大手町遺跡<br>福岡県北九州市小倉北区大手町12－1 | 武家屋敷跡<br>（小倉城土塁外） | （高取製品） | 注 28 |
| 4 | 砥石山遺跡<br>福岡県北九州市小倉南区下城野2 | | 白旗山系碗、銘系碗、他 | 注 29 |
| 5 | 小糸遺跡<br>福岡県北九州市小倉南区大字頃力 | 銅山 | 碗2、小鉢2、陶印1、他 | 参 19 |
| 6 | 茶屋原西遺跡<br>福岡県北九州市八幡西区馬場山949 | 町屋<br>（長崎街道沿い） | 白旗山以降が主体、茶入2、碗13、皿、向付、他 | 参 18 |
| 7 | 福岡城三の丸遺跡<br>福岡市 | 城跡<br>（三ノ丸御鷹屋敷） | 小石原銘茶入5（その他9）、内ケ磯碗1、白旗山碗2、他 | 注 30 |
| 8 | 有田・小田部（103次）<br>福岡市早良区有田・小田部 | 富裕農民屋敷跡 | 瓶類、他 | 参 17 |
| 9 | 堺環濠都市遺跡SKT79<br>大阪府堺市材木町 | | 鉢 | 参 16 |

※　上野・高取については、この他に、いずれか識別不明と報告されている例、安養寺跡（魚市場跡・大阪市中央区）、姫路城跡中曲輪武家屋敷跡、北万遺跡（北九州市）などが知られる。

鍋島　　表－7

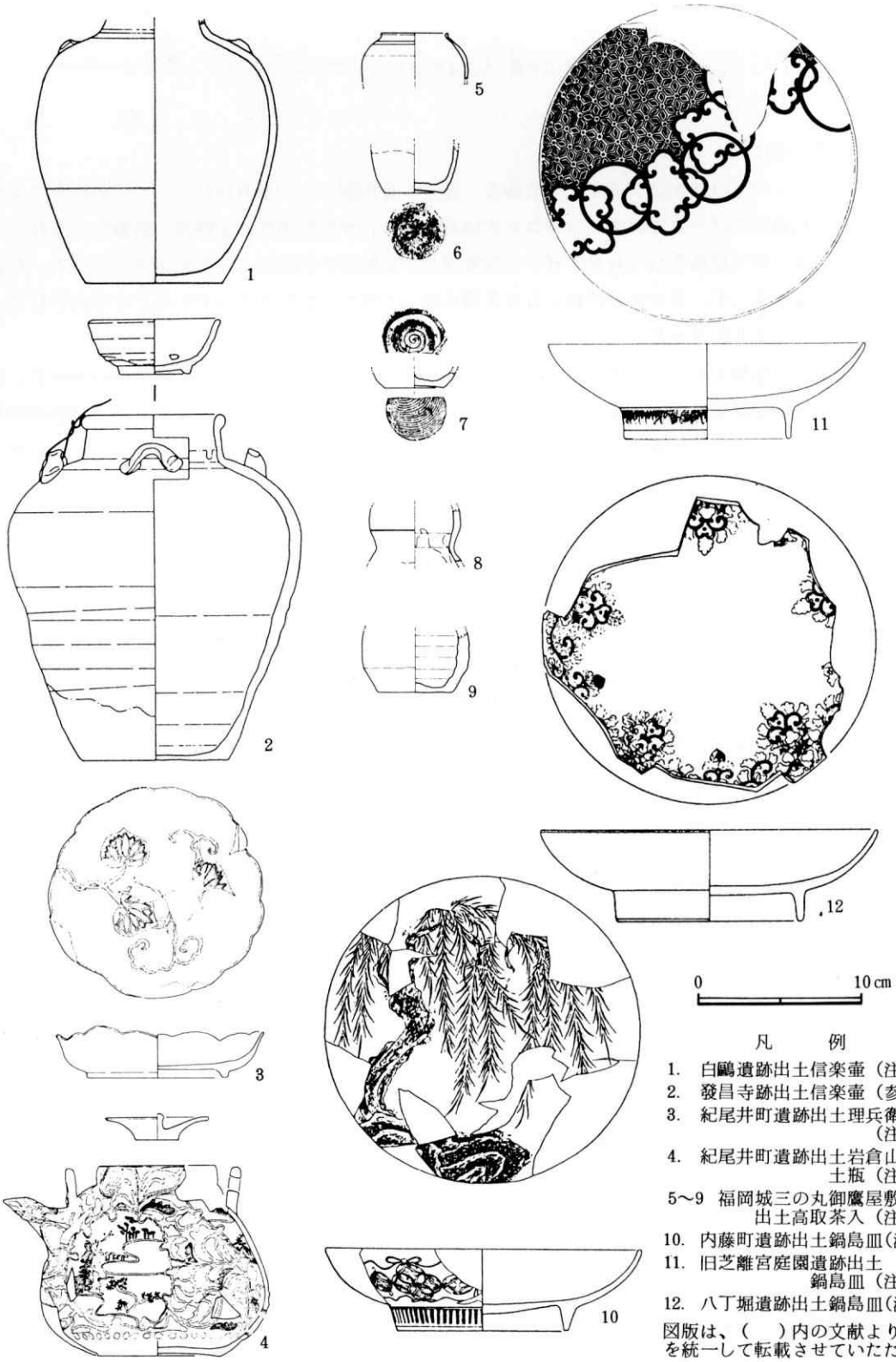
| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 八丁堀遺跡<br>東京都中央区八丁堀 | 町屋 | 色絵鉄線唐草文尺皿 | 注 32 |
| 2 | 郵政省飯倉分館構内遺跡<br>東京都港区麻布台1 | 大名屋敷跡<br>（臼杵藩下屋敷・他） | 擂鉢輪変形皿 | 参 2 |
| 3 | 旧芝離宮庭園遺跡<br>東京都港区海岸1－13・14 | 大名屋敷跡<br>（小田原藩上屋敷・他） | 青磁染付皿、染付皿 | 注 31 |
| 4 | 白金館址遺跡Ⅰ<br>東京都港区白金台5－20 | 武家屋敷跡<br>（幕士邸） | 染付皿 | 参 1 |
| 5 | 芝神谷町町屋遺跡<br>東京都港区虎ノ門5 | 町屋 | 染付皿片3点（2個体分か） | 参 4 |
| 6 | 三栄町遺跡<br>東京都新宿区三栄町22 | 武家屋敷跡<br>（伊賀者、御持組他） | 染付皿片18点<br>（内2個体分は色絵素地） | 注 35 |
| 7 | 北山伏町遺跡<br>東京都新宿区北山伏町22 | 大名・武家屋敷跡<br>（大名・旗本・御家人） | 染付皿片4点 | 参 3 |
| 8 | 下戸塚遺跡<br>東京都新宿区西稲田1－20 | 大名屋敷跡<br>（水戸藩付家老江戸屋敷） | 染付果実文皿（中山備前守） | 注 9 |
| 9 | 内藤町遺跡<br>東京都新宿区内藤町 | 大名屋敷跡<br>（高遠藩下屋敷跡） | 色絵を含む盛期の陶片194点<br>（色絵立個体4点、変形皿、青磁染付、他） | 注 33 |
| 10 | 東京大学本郷構内遺跡医学部付属病院地点<br>東京都文京区本郷7－3－1 | 大名屋敷跡<br>（大聖寺藩上屋敷・他） | 色絵皿2点、染付皿2点、青磁染付1点、薄擂鉢皿2点 | 注 10 |
| 11 | 真砂遺跡<br>東京都文京区本郷4－15－2 | 大名屋敷跡<br>（小笠原佐渡守中屋敷・他） | 染付皿片25点、青磁皿片2点 | 注 36 |
| 12 | 真砂遺跡第2地点<br>東京都文京区本郷4 | 武家屋敷跡<br>（旗本及び同心） | 薄擂鉢数文皿2点、染付変形皿2点、染付皿2点、色絵猪口、染付青磁皿各1点 | 参 9 |
| 13 | 白鷗遺跡1<br>東京都台東区元浅草1－22 | 大名屋敷跡<br>（出羽松山藩上屋敷） | 染付皿19点 | 注 37 |
| 14 | 柴又河川敷遺跡<br>東京都葛飾区柴又6－24 | | 染付皿 | 注 34 |
| 15 | 名古屋城三の丸遺跡裁判所合同庁舎地点<br>名古屋市中区三の丸 | 城跡<br>（三の丸武家屋敷跡） | 染付皿 | |
| 16 | 高陽邸跡<br>京都市下京区烏丸通綾小路下ル | 公家屋敷跡 | 染付柳白鷺文皿 | 参 12 |
| 17 | 三條西殿跡<br>京都市中京区烏丸通三条上ル | 町屋？ | 染付皿（2点、一個体分） | 参 13 |
| 18 | 特別史跡姫路城跡白鷺中地点<br>兵庫県姫路市本町68 | 武家屋敷跡 | 青磁鉢 | 注 21 |
| 19 | 長尾遺跡<br>佐賀市金立町金立字十一本杉 | 武家屋敷跡 | 染付皿（色絵素地） | 注 38 |
| 20 | 深堀町遺跡<br>長崎市深堀町5 | 武家屋敷跡<br>（鍋島深堀氏屋敷） | （鍋島片） | |
| 21 | 高島秋帆邸跡<br>長崎市万才町 | 有力町人屋敷<br>（町年寄） | （鍋島片） | |

八代　　表－8

| | 遺跡名（所在地） | 遺跡の性格 | 摘要 | 参考文献等 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 紀尾井町遺跡<br>東京都千代田区紀尾井町 | 大名屋敷跡<br>（紀州藩上屋敷） | 象嵌短頸壺 | 注 13 |
| 2 | 真砂遺跡<br>東京都文京区本郷4－15－2 | 大名屋敷跡<br>（小笠原佐渡守中屋敷・他） | 象嵌文碗 | 注 36 |
| 3 | 白鷗遺跡1<br>東京都台東区元浅草1－22 | 大名屋敷跡<br>（出羽松山藩上屋敷） | 象嵌文壺の蓋2点 | 注 37 |

凡例

注は、本文注に引用した文献。　参は、参考文献としてあげたものの番号を示す。




凡　　例

1. 白鷗遺跡出土信楽壷（注37）
2. 發昌寺跡出土信楽壷（参５）
3. 紀尾井町遺跡出土理兵衛皿（注13）
4. 紀尾井町遺跡出土岩倉山印土瓶（注13）

5～9　福岡城三の丸御鷹屋敷出土高取茶入（注30）

10. 内藤町遺跡出土鍋島皿(注33)
11. 旧芝離宮庭園遺跡出土鍋島皿（注31）
12. 八丁堀遺跡出土鍋島皿(注32)

図版は、（　）内の文献より縮尺を統一して転載させていただいた。